

『家族不適応殺』

2021年11月22日

殺人の罪を犯す場合、抑えられない怒りや恨みとか、松本清張の小説では、知られたくないことを暴露されることを恐れて、殺人に走るとか、生活に困窮して、人を殺めるとか、それなりの深い動機があろう。ところが近頃は、動機が明確でなく、相手は誰でもいいと無差別の殺人事件が多いように思う。そして、自分では死にきれず、死刑になりたかったと平然と言う人がいる。被害に遭われた人には全く理不尽で、無念であり、遺族の怒り、悲しさはどれほど深いだろうか。被害者に同情し、遺族への温かい支援を望む。加害者には当然、罪の償いを求める。しかし、加害者を断罪するだけではなく、殺人に走る経緯を十分に解き明かすことが犯罪防止のために必須のことではないかと思っている。

最近、加害者の生育歴、家族関係、友人関係、社会での生活などを克明に調べて報告する書籍が多く出版されている。これらを読んで、加害者に同情すべきことがあると考えさせられ、また、社会の在り方を問われていることが多々あると思わされる。

インベカヨリ氏の『家族不適応殺』を読み、理解できず頭がクラクラした。2018年6月9日、新幹線の車内で、22歳の小島一郎という青年がナタを振り回し、一人の男性を殺害し、二人の女性に重軽傷を負わせた。写真家のインベ氏が小島に興味を持ち、3年にわたる取材を続け、小島の生活歴、思想性などを追いかけて、ルポルタージュを上梓している。

裁判長が、「無期懲役に処する」と告げると、小島は、「控訴しません。万歳三唱をさせてください」と言い、制止を振り切って、「ばんざーい!ばんざーい!ばんざーい!」と繰り返した。小島は幼い時から、若者が野球場やサッカー場に行ってみるように、無期懲役になって刑務所で過ごすことが望みであった。それが叶い、喜んだという訳である。小島は貧しい家庭で育ったのではない。また、家族は両親、母方と父方の祖母たち、伯父もいる家庭であった。殊に、母親は、マザーテレサと評判されるほど、ホームレスの世話をし、受刑者の支援活動もしていた。インベ氏の取材では、家族の証言は食い違うことが多かった。愛と憎しみが入れ替わり、不適応な家族関係に見える。

小島はホームレスの生活をしたり、餓死を求めて、山奥に入り断食したりしていた。鑑定医が法廷に出した診断は「猜疑性パーソナリティ障害に該当する」と、人格障害であるが、精神障害ではないという鑑定結果で、知能検査では言語理解はIQ126であった。難解な本を読み、インベ氏への手紙には、ドストエフスキー、ニーチェ、親鸞、聖書などの言葉が引用されている。小島は、刑務所暮らしが一番幸せと言い、「キリスト教徒が修道院に入るように、仏教徒が山門に入るように、私は刑務所に入りたい」と供述している。検事が「修道院には神の加護が、山門には仏の加護があるけれども、刑務所にはない」と言うと、「国家の加護がある」と答えた。小島は、生存権は国家が保障し、国家の加護の中で生きると主張する。現在、家や仕事のない人が、犯罪を繰り返し、刑務所暮らしを求めて、再犯に走る人が増えているという。小島の場合、「二度と普通の社会に出られないよう全力を尽くす」と言い、刑務所内に糞尿をまき散らし、断食をして、国は自分の命を守ってくれるか、生きていてもいい人間なのかを確認している。インベ氏は、小島にとって刑務所こそが、自分の生存を保障する母、家庭であると分析している。自由が著しく制限される刑務所に宗教的願望のように入ることを望むことは、私には理解できない。

人は皆、居場所を求めている。その居場所は、愛され、必要とされていることを実感できる場である。多くの人が居場所を得られず、深い虚無の中を漂っているのではないか。虚無が広がっている現実に、どう向き合って、生きるのかを問われていると思った。